

e-アジア国際シンポジウム 2011 (The e-ASIA International Symposium 2011)

実施機関：一般財団法人 武田計測先端知財団 (総括責任者：唐津 治夢 (武田 郁夫))

実施期間：平成 23 年度

プロジェクトの概要

アジア各国や日本の科学技術コミュニティ、民間営利・非営利セクター、政府関係者等の幅広いステークホルダーや政策関係者、社会学者が参加する e-ASIA 構想についてのワークショップと国際シンポジウムを開催する。e-ASIA 構想の利点、課題、解決策等について多面的な視点から様々な議論を展開することにより、これらステークホルダーと一般の参加者が域内連携の在り方について理解を深めることを目的としている。2011 年の事業は、継続的国際対話の第一回と位置づけ、次回の国際対話に向けてのステップとする。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	b

総合評価：A (所期の計画と同等の取組が行われている)

(2) 評価コメント

アジア域内連携に向けて信頼関係の醸成を目指し、当初の計画に沿ってワークショップ、シンポジウム、及び関連事業が着実に実施されており、所期の計画と同等の取組が行われたと評価できる。幅広い領域について議論が行われたが、その継続的な展開にあたっては、対象領域の絞り込みによるアクションプランの明確化及びその具体化に向けたさらなる工夫を期待する。

・**目標達成度**：アジア 8 か国の科学技術コミュニティ、民間営利・非営利部門、政府関係機関の代表者等が参加し、幅広く科学技術に係る連携を行うための共通理念を構築するための関連諸問題について討議を行ったことは評価できる。

・**成果**：アジア各国から科学技術コミュニティ形成に向けてキーパーソンを招聘し、包括的な視点から取り上げるべき課題等を討議したことにより、アジア域内連携の必要性についての認識を醸成し、我が国のプレゼンス向上につなげたことは評価できる。本シンポジウムを契機に、今後キーパーソンによる我が国への波及効果がより一層得られることを期待する。

・**計画・手法の妥当性**：短い準備期間にもかかわらず、諮問委員会等の支援を得て、会議参加者や議題等をよく練り上げていること、会議の開催、その後の報告取り纏め等に順調に取り組んでいることは、計画・手法が妥当であったためと評価できる。

・**実施期間終了後における取組の継続性・発展性**：継続して議論すべき多くの課題があるため、継続して展開する意義があること、及びその仕組み作りもできていることは評価できる。しかし、今後の展開に際しては、招聘者の見直しを行うなど焦点の絞り込みを行うとともに、本シンポジウムの内容及び成果に関する一層の情報発信が必要である。